らである。

私達ロシヤ人は誰よりも利己的でない。私達は抽象的な正義觀念からでなく、犧牲を拂ひながら、併合と賠償とを否定するのである。私達は波蘭土を自由にし、犧牲を忘れ、損害を自分に引受けつゝある。けれども私達は自分の同盟から脱退はしない、單獨講和に私達は行くことが出來ぬ、そして夫故に同意と一般の利益に於てのみ平和を達成しなければならぬ。白耳義、波蘭土、塞比亞、アルサスの利益も私達にとつては、波蘭土人、白耳義人、佛蘭西人にとつてと同じやうに緊喫である。

だが同時に、私達は待つてゐることが出來ない、何故なら敵は闕に迫り、祖國は破滅の瀬戸際にあるのだから。

私達はひよつとして『全世界の民主々義』が再び結合するであらうことを、獨逸に革命が起るであらうことを、待つてゐることが出來ない、何故なら私達が待つてゐる間に、私達の祖國は破滅に渡され、軍隊の混亂に附物である無政府が國内を領するであらうからである。が無政府の暗い嵐のなかでは暗い力が暴威を揮ひ、私達にとつて何よりも大事なものが、私達の自由が血の

なかに埋められるであらう！

私達は防がなければならぬ、戰はなければならぬ。がそれは何を意味するか？

平和に書き物机のうしろに坐つてゐる人々、平和に機械臺のそばに立つてゐる人々、彼等だけが國防を國防としてのみ語ることが出來る。戰爭を、その條件を、その戰術的法則を知つてゐる人々は、受働的國防なるものが無いし又あり得ないことが解つてゐる。防禦は攻擊しながらのみ可能である。これは戰爭の伊呂波である。

受働的防禦は——敗北の保證である。現代の銃砲火の下にあつては、不變の境界にあつて敵を擊退することは不可能である。一つ處に止まつて攻擊し來る敵の砲火を堪へることは不可能である。逆襲によつてのみ攻擊を退けることが出來る。受働的防禦にあつては戰線の決裂を免れない、そしてその結果は一般的退却である。

けれども、この戰術的原則を外にしても、受働的國防にあつては、私達は敵の手を解くことになり、その結果は彼をしてその力を英軍、佛軍に振り向け、そして彼等を片付けて置いて、私達をも單獨に片付ける可能を與へることである。

決論を出さないにしても、私達は自分の無活動によつて私達自身が希望する平和に遠ざかりつつあることを理解しなければならぬ。

決論は全く明かである、私達は攻勢を取らなければならぬ。私達は一團となり、一切の個人的な利害關係を忘れ、一切の理論的な爭ひと不一致とを忘れて、私達の軍隊の戰鬪能力を高め、そして前進しなければならぬ。

一歩々々が私達を平和に近付ける。

今や、佛軍及び英軍が、全力を竭して、攻擊をしてゐ、明かに獨軍が兩方の戰線で攻勢を取る可能を有しない時、露西亞の決定的攻擊は一擧にして勝利を齎らし、最も近い將來に平和を私達に與へるであらう。

そして打ち明けて言ふと、時は進みつゝある、英軍の襲擊は最早殆ど喰ひ止められやうとしてゐる、時は殆ど逃されやうとしてゐる！

時を延ばすことは——死に等しい！

『私はもう晩いことを恐れる！』と私達に陸軍大臣が言つた。

そしてこの眞實をひし隱しに隱してゐる人々、心を落着かせる言葉を求めてやまない國民に、軍隊は秩序を保つてゐる、大臣の言葉は病氣のせいであることを信じさせてゐる人々、彼等は——裏切り者であり、意識的若しくは無意識的の賣國奴である！

私達に殘された多からぬ日を守るために、そして攻勢を取るために、全力を竭さなければならぬ。

が勝利が得られるであらう時、露西亞が當然自分の大なる地位を平和會議に占めるであらう時その聲は、『非併合、非賠償の平和』に就いての國民の意志は、世界の到る所に於ても聞かれるであらう。

聞かれるであらう、そして聞きとゞけられるであらう。

應報の時

如何なる距にてもあれ
その罰は恐ろしかりき！

プーシュキン

一

斯くも長い間そして斯くも熱心に、苦しみぬいた露西亞の國民が待つてゐた所のものが成就した。

けれども何處に一般的な喜悅、何處に國を擧げての歡びがあるか？

國民は默して語らない、それで只だ自分の感情を政黨の首領達と新聞だけが發表してゐる。

そしてその何れもが力强い表現を吝まない。

言葉は、無論、違つてゐる、だが、調子は同じである、一般的な呪ひの大合唱のうちに、レーニンの聲をどん尻りの『ブルジョア文士』の聲から區別することは困難である。

二つの極端すら相合ふ瞬間がある、斯くてこのあり得べからざる媾和の批判に於て、最も烈し

い敵意を含んだ政黨間に感嘆すべき意見の一致を見た。

「過酷な、在り得べからざる、掠奪的な、不幸な、不德な、屈辱的な媾和！」

他の如何なる形容詞も、政權の側に立つ政黨首領の演說のうちにも又ブルジョア新聞の論說のうちにも存しない。

乍然、すべて此等の表現は私を滿足させない。

そこには、無論、力の多くがある、けれども、矢張り本當の定義ではない。

夫故に私は自分のを、恐らくは最も含蓄ある定義を提出する。

糞汁的媾和！

蓋し獨逸人自身が久しい以前に豫言したのである。

『露西亞は獨逸文化の培養の爲めの肥料たるべく運命づけられてゐる！』

そして今や、この豫言が實現されつゝある……そこに彼女は、何故にか大帝國と考へたこの巨大なる人糞の塊りは、横はつてゐる……獨逸の勢力がそれを掘碎いて、獨逸の種子の下に敷く時の來るのを待つて、横はつてゐる。

さうだ、人糞の塊りだつた、そしてそれ以上の何物でも無かつた！

無論、そのうちには眞珠の粒があつた、けれどもそれは稀であつた、そしてその爲めに糞の塊りが腐つてドロ〳〵になることを止めはしなかつた。

君主獨裁の嚴冬が君臨してゐた間は、この偉大なる塊りは、專制的な權力の酷寒に鎖されて、どうにか斯うにかその形態を保つてゐた。

無論、凍つた表皮の下にあつては寧ろよりよく解體の過程が進んだのであつた、けれどもそれは、少くとも、眼に見えなかつた、そして大多數のものは、この皮の下には凡て眞珠の粒だけがあるのだ、と眞面目に確信したものであつた。

革命の春風が吹きそめ、糞の塊りの上にも自由の熱い輝かしい太陽が昇りそめるや否や、塊りは身震ひした、顫動し始めた、そして眼れ上つた。

そして、濁つた惡臭の液汁のうちには無數の蛆が蠢き始めた。

それがどの位ゐたか？……すべては愚劣な、すべては盲目な、乍然、意地惡い赤い芥子頭を持つた彼等は狂暴にドロ〳〵した腐れ水のなかに又殼の上に、無意味な憤怒と盲目とのうちに、唯だ

一つのこと、即ち解體に役立つてゐるのだと云ふことを氣付かずに蠢いてゐた、這ひ廻つてゐた、押合つてゐた、嚙合つてゐた。

が、彼等の上には已に、施肥が出來あがつたか、それとも、も少し放つて置く必要があるかどうかを巧に見分ける經驗の積んだ百姓の眼を持つた『善良な』獨逸のビュロクラーハが立つてゐた。

二

獨逸の條件に署名したものか、しないものか、どちらがいゝかと云ふことに就いては多くの議論があつた。

勞農政府の會議では平和條約を中心にして怖しい論爭が沸騰した。

が、私がその紛爭に關する報告を讀んだ時、私に執念く想ひ出されたものは、セバストポルで殺された士官の細君が夫の死體を搜索させる爲めに海底に遣した潛水夫の物語であつた。

この潛水夫は海底に着くか着かないに早くも引上げの合圖を與へた。

そして、人々は已に氣狂になつた彼を引上げた。

——彼等は議論をしてゐる……手を振つてゐる……あすこで會議をしてゐる！——と不幸な潜水夫が言つた。

問題は亡者達を重いおもしを足に結いて海に投じた所にある、で、解體が始るや否や、總ての死骸は眞直に突立つた、そして海底の潮流が彼等をして身震ひさせ水中に手を動かしめた……。

然り、此海底に於ける亡者達の『會議』こそは勞農政府會議が私に思ひ出させた所のものである。

彼等も亦『議論をした、そして手を振つた、』けれどそれは全く無益であつた、蓋し戰爭と平和の問題にあつては、彼等は已に久しく政治的亡者になり終つてゐるからである。

レーニンは全く正しかつた。

神聖なる戰爭に就いて、國際勞働黨の事業に對する裏切りに就いて、民本主義的熱情に就いて、舉國一致に就いて、背德よりは寧ろ死の方がいゝと云ふことに就いて、美しい革命的な文句が言はれ得る。

けれども言葉は言葉に止まり、事實は事實に止まる。

抵抗は不可能である、蓋し何人にも抵抗すべからざるが故である。

軍隊が無い、將校階級が打破されたまゝである、眞の革命的な民主黨員は餘りに少數である、ブルジョアとインテリゲンチャとは無意味なそして無殘なテロリズムによつて墮落させられてゐる、が、國民は掠奪品の分配に走り去つた、そして祖國に對しても、不德に對しても、革命に對しても唾せんことを欲してゐる。

斯くの如き條件の下にあつては、今後一切の言葉の劍を振り廻すことは只だ獨逸側からの更に重大な要求に對する尤もらしい口實に役立つに過ぎぬであらう。

露西亞は戰爭から脫退したのみならず、彼女は一般的に言つて永久に國家的價値を喪失した、そして誰が此の間に處して罪があらうとも、抹殺すべからざる悲むべき事實として殘るであらう。

斯くて一切の先きの先きまでの審議なしに平和條約に署名したことに依つて、レーニンは、恐らく、初めて正確な計算に據る現實の力に直面して立つものゝ國家的の總明さを宣揚したものである。

三

けれども他の一面から見れば、レーニンは全く平氣に此の平和條約に署名しないことが出來たであらう。

その方が一層よかつたかも知れぬ、何故なら、それに依つて我等を勝利者の恩惠に對してお釣りをする不徳から救つたであらうから、だが、結果は何れにしても同一であつたであらう。

蓋し平和が締結されてゐるにしても、私はこの平和を信じないから。

獨逸人は中途半端で止まるには餘りに綿密なそして又執念深い國民である。

その一部を切つて取られこそしたが、濱され無力にされこそしたが、だが矢張り獨立の露西亞は獨逸人が夢想してゐる如き『肥料』ではあり得ない。

夫故に私は斯くまでに早急に我等によりて締結された平和が、同樣に獨逸によりても亦締結さるべしとは何としても信じない。

この歴史の全部が只だ一場の巧妙なる喜劇であり、掠奪的な條件は露西亞が之れを容れないやうに、そしてさうすることによつて獨逸の最も極端な要求に肯定を與へるやうにのみ提出されたのであると云ふことは、最もあり得べきことである。

レーニンと同じく、私も亦この平和を『小憩』と觀ずる、だが晉に勞農政府並に露西亞革命に取つてばかりではなく、獨逸の追擊に取つてもである。

問題は、市民の虐殺と紛亂によつて釀された我等の無援の狀態を精算して、獨逸人が最も取るに足らない力を露西亞の上に投じたことである。

彼等は、その初めに於て如何なる抵抗にも出會はないであらうことをよく知つてゐた、で只だ正氣に返らさないやうに、只だそれのみに骨を折つた。

『早く、何でもいゝから早く』と云ふ命令に從順である彼等の劣弱なる軍隊は、歩いてゐなかつた、が走つた、日となく夜となく前進を續けながら、停車場に次いで停車場を占領しながら、兵站線の防備に意を用ゐることなく、既得の陣地を固めることなく、相當の守備隊を背後に殘留せしめることなく。

そしてこの計算は正しかつた。

——可能なるものは遁れよ……獨軍來る！——混亂を極めた號叫は露西亞の戰線を吹きまくつた、そして可能なりしものの總ては、其眼の向ふ所に向つて走つた。

嘗て勇敢であつた、だが今は全く消魂した露國軍人の眼には、恐怖のために總てが三倍に見えた。

四人の獨逸兵は一軍に思はれた、三ジュイム口徑砲の三個の發射は颶風のやうな砲火に見えた。すべては頭を振りたくつて走つた、が獨軍は時に遁走者を追ひ越した程、それほど速に進軍した。

或る驛に遁走して來た露西亞の兵隊がそこにある列車を押收しようとした時、驚くべきことにはそれが已に獨逸軍隊のであることが解つた場合すらあつた。

斯くの如きは、即ち獨逸軍隊の疾風の如き進出であつた、だが彼等の迅雷的な背後には自分の軍隊の行動を監視して、そして丁度いゝ時に『その場に停れ！』と命ずる所の悠然とした冷靜な命令が控へてゐた。

ヒンデンブルグ乃至ホフマンの徒は、凡ゆる混亂に限度があり、潰走しつゝある露西亞の軍隊が、山の頂から山麓に向つて轉落しつゝある雪の塊りの如くに其形を大きくしながら、遂にはその名狀し難い混亂にあつてさへ危險となる如き、さうした大團塊にまで成長するかも知れないこと

を、よく知つてゐた。

事實さうであつた。露軍が遠く遁げれば遁げる程、彼等の集團は濃密となり、そして遁げ足はのろくなつた。混亂が離れた、そして潰走しつゝあるものは本能的に嚙まんとするの勢を示した。

もう少ししたら、恐らく、弱小なる獨逸の軍隊は同じやうに急速にもと來た道を轉がり飯らなければならなかつたであらう、だが『道德的感應』は事實となつて現れた、ペトログラードからは『總ての條件に對する』同意が飛んだ、それは恰も獨逸の將官が自分の『その場に停れ！』を將に命令しやうとしつゝあつた丁度その時であつた。

呼吸せき切つた獨逸軍隊は停止した、そして息を入れた。

中心地の占領と獨逸の意のまゝに完全に露西亞を屈服せんとするこれからの問題の爲めには——現實の獨逸の兵力を持つとしては已に不充分であつたのである。

新しい媾和談判とその批准の爲の相當期間とは、占領した獲物を利用し、兵站線を整へ、已に現實する戰鬪力を充實する爲の充分な時間を獨逸に與へた。

『不可能な、掠奪的な』條件が承認されるであらうと云ふことに就いては、獨逸は全く不安を感

じなかつた。

最初、彼等は總ての媾和條約が『紙片』に過ぎないことを宣言した、が次ぎに、媾和條約に據つて受けさられた義務が勞農政府の存在それ自からに、早くも平和條約に署名の翌日に於て獨逸側にこの條約の完全な法律的違犯に對する必要なだけの口實を與へるこさゝなる程、裏切つてゐるこさを知つたのである。

事實その通りであつた。

彼女自身が自から亡ぼすこさを欲しない結果として、勞農政府は赤衛軍を解散させるこさも、ウクライナ及びフインランドから自己の軍隊を撤退するこさも、世界的革命の宣傳を中止するこさも出來なかつた。

だが、これが平和條約の根本的要求であつたのだ。

けれども獨逸はすべて此の間の事情を豫め、自分の進擊を中止するこささへしなかつた程、よく知つてゐた。

そして最も壯嚴なる平和條約批准の數日に、獨逸の軍隊はキエフを占領し、ニコライエフを占

領し、オデツサを占領してハリコフに迫つた。

ウクライナの土賊、ルーマニヤ人、及びフインランドの白衛軍の助力によつて、大手術に必要な兵力が出現した地方にあつては、獨軍は更に深く侵入するこさを續けた。兵力の補充さ政治的戰略の精算さを必要さする地方にありては、獨逸はその條件に全身の重さを托しながら、言葉だけの『中立地帶』を建設しつゝある。

その地帶を、若しそれが必要であり且つ可能であるこさを見出しさへするならば、彼等はその瞬間に於て犯すであらう。

四

何人も、併しながら、若し獨逸にして希望さへするならば、赤衛軍に對し、プロレタリアートの奮起に對し、革命的感激に對し、その美しい……事實ではない、言葉に對する如何なるヒステリックな號叫にも耳を借すことなく、ペトログラードを取り、モスクワを占領するこさが出來るこさを疑ひもしない。

或る者、殊に自己の社會的空想の最後に信用を置き得ない過激派領袖の間には、猶ほ弱くして悲しい希望が殘つてゐた、獨逸はこれ以上の進出と勞農政府に對する强壓とを敢てすることを欲しないであらうと。

『信ずる者は幸なり！　彼には此の世に於て溫かである！』

けれども、冷やかな判斷は信仰を有しない。

何が獨逸人には露西亞から必要なのであるか？……

軍事的援助としては英國人に對し亦佛蘭西人に對して露西亞は已に久しい以前に於て落伍した。

再び軍國的强國となり、獨逸を劍を以て威嚇し得る爲めには、彼女は十年の歲月を必要とする。獨逸はそれを知つてゐる、赤衞車の價値を知つてゐる、そしてこの側に於ては彼は決して不安を感じない。

露西亞が彼等に必要であるのは、第一に、經濟的封鎖の廣い出口として又獨逸に取つては空氣の如くに必要である麵麭と生物（なまもの）との無盡の源泉としてゞある。

從つて獨逸人は、無政府主義に捉はれ、運轉機關を破壞され、國內到る所に市民戰の火の手があがつてゐる露西亞は、麵麭も生物（なまもの）も彼等に與へることが出來ないであらうと云ふことを理解しない譯には行かぬ。

第二、露西亞が彼等に必要であるのは、『獨逸文化を植付くべき土壤を肥やす肥料』として、即ち獨逸殖民政策の爲めの廣漠なる原野としてゞある。

だが、熱騰せる狂人の家に於ては如何なる活動も不可能である、加之確かな滅亡と噴火口の如くに沸騰しつゝある國家の中心へ向つての避け難い犧牲に進むべく決心するものゝ餘りに尠いであらうことは無論である。

而も猶ほ如何なる手段を持つて、露西亞に獨逸の資本と商業と工業とを、特に資本主義に對して容赦ない戰ひを布告しつゝある政府が彼處に君臨してゐる限りに於て、確立し得るであらうか？……

故に、獨逸人に取つては二途の中一途が殘るばかりである、この政府を顚覆するか然らずんば麵麭を斷念し、生物（なまもの）を斷念し、市場を斷念し、殖民を斷念するか。

そして、それ以上に、絶えず資本主義的な、軍國主義的な、帝國主義的な獨逸の凡ゆる組織に敵意を持ち且つ無關心である過激派的傳染病が傳はつて來るかも知れない國家を隣境に持つか。

如何なる平和條約も經濟同盟も、無論、獨逸人を保證しない、蓋し露西亞が『社會主義的國家』である限りに於て彼女は己に自己の存在の事實そのものによつて獨逸に取つては恐るべき脅威であるからである。

が、すべてこの事實からして、露西亞の『自由』の日の數へ盡されてあることは、神の日の如くに明かである。

我等は相率ゐて露西亞を亡ぼした、がボリシエウキイは革命を粉碎した。

そして今や彼等を呪ふ力をさへ有しない、蓋しさうすることが矢張り己に何等の結果をも齎さないからである。

我等と彼等

一

舊い組織では露西亞は二派に分かれてゐた、貴族的な宮僚とその殘りの全露西亞國民と。

それは『我等と彼等』であつた。

我等、即ちすべての露西亞の市民——百姓、勞働者、智識階級、企業家、商人、地主及び兵士——は、我等の都合のいゝやうに考へ且つ望むことが出來た、併し我等の生活は唯だ『神聖なる』君主を初めとして、支配的地位にある貴族の少數な集團に都合のいゝやうにのみ立てられてゐた。

『彼等』は全く我等の要求や希望に無關係だつた、そして我等を、『臣民』として、この卑しい言葉の文字通りの意味に於て、眺めてゐた。

我等の抗議に對して唯だ一つの答があつた。

『かうだつた、かうであるだらう！』

我等の威嚇に對して彼等は答へた。

『嚇かすな！』

そして自分の人間的な權利のために反抗しようとする一切の企畫を鐵と血とをもつて壓へて來たのである。

長い、光なき年月、齒を喰ひしばり胸をさすつて、我等は、遂に國民の忍耐に終りが來るであらう時を待つてゐた。

そしてその時が來た。

『彼等』は我等、貧乏なそして武器を持たないものを、犧牲として敵に賣つた、そして今度はプロトポポフの機關銃でも嚇されなかつた國民が反抗の赤旗を擧げた。

『彼等』は犯罪者として、監獄に打ち込まれた、露西亞の分裂が消滅した、國には『我等』だけが——自由の地の自由なる市民だけが殘つた。

我等が命令によつてでなく、自分の意志によつて生き、考へ、感じる權利を受ける時が來た。

『何といふ廣さだ！』と我等は叫んだ。『遂々我等だけになつた！　抱き合はう、兄弟よ、そして自分達の生活を自分流に、同胞愛と平等と自由の基礎の上に打ち立てよう。全露西亞の市民達よ、團結せよ！……唯一のそして偉大なる露西亞の國民、萬歳！……』

二

されど人間が豫想し、惡魔が一切の穢れを作る！

そして今や、何處か赤いパンフレットを並べられた書棚の上に、小さな灰色の小人達が坐つてゐた。

小つぽけな狹い額を擧めて、彼等は熱心に部厚な『資本論』を研究し、エルフルトのプログラムを暗記し、カウツキイを勉强し、恭々しく自分達の眩んだ眼をマルクスの肖像畫の上に屢叩きはじめた。

交互に恭々しく喜ばしげに顏を見合せては、『我等は地の鹽だ、』と彼等は言つた、『我等は大なる理想の奉持者であり、自由と一般民衆の幸福のための眞のそして唯一の戰士である！……』

所でそれは、露西亞の國民が奴隷の鎖を拂ひ落すであらう時、彼等はどういふ風に露西亞の生活を立て直すかといふことに就いて果てしのない論爭をするのに邪魔にならなかつた、そして火の出るやうな議論の最中に彼等はお互に馬鹿呼ばはりして、相手の小さな缺點を數へあげるに容

赦しなかつた。

時々彼等は飲み合つた、肘のところの擦れ切れた脊廣のボタンを脫して、ビールを飲み、夢中になつてインターナショナルやその他のよい歌を怒鳴り散らした。

尤も彼等、眼をキョト〳〵さしてゐるパンフレット式の小人達の間に、明るい眼をもつた大人のゐたことは事實だ。

けれどもこれ等の大人達は餘りに氣短で、自分の安全な書棚の上にのつかつてゐないで、拷問臺の上に攀登つたので、それで彼等は殆どすべてその時々に絞め殺されて終つたのであつた。

露西亞の國民が、實際に、自分の鎖を投げ棄てた時には、そんな譯で大人達からは唯だ悲しい追憶だけが殘つてゐるに過ぎなかつた。唯だショボ〳〵眼の小人だけが健康であつた、そして國民が、赤い旗を打ち振り、マルセーユズを高く唱へながら、同胞愛と平等と自由との王國へ向つて、行進を起こした時、これ等のショボ〳〵眼の小人達はゴム鞠のやうに自分達の棚から轉げ落ちて、行成り道を遮つて、實に憤慨して叫んだのである。

『とまれ！……何處へ行く？……どんな同胞愛だ、何のための平等だ？……階級爭鬪の原理をど

うする？……『資本論』をどうする？……プログラムをどうする？……』

さう言つて爪先で立つて、細つこい腕を振り廻しながら、鼻聲で自分達のインターナショナルを唱ひ出した。

がそれから、隙かさず、群集の中に紛れ込んで、ビラやパンフレットを引摺り出して、額を拭つて、そして今から露西亞の國民は如何に生き、如何に考へ、如何に感じなければならないかといふことに就いて議論し初めた。

彼等の顏付は非常に眞面目で、非常に殿篇に眼を屢叩き、非常に憤激して叫ぶので、周圍のものは皆な森と靜まり返つて、含羞み出したくらゐであつた。

偉大なる露西亞國民は頭の後ろを掻いて、そして從順しく脇へどいた。

『誰が彼等を知らう、』と彼はすこし嗄聲で言つた、『彼等が正しいのかも知れん！……彼等は革命では苦勞してゐるのだ、かわしはどうだ……何でもない、灰色なんだ……やつと昨日生れたばかりなんだ……』

斯くて何人も、實にこの瞬間に再び露西亞の分裂が『我等と彼等』となつて現はれたことに氣付かなかつた。

『彼等』——黨派的智識階級の支配的集團と、『我等』——卽ちその殘りの全露西亞國民と。

三

『彼等』が、この『彼等』が誰であらうとも、常に宿命的に非才であるのは、それは必ずや自然の法則であるに相違ない。

舊政府は、その無能さによつて輝いてゐたと、言へば言へる。併しショボ〳〵眼の小人達は、お望みなら、輝き過ぎもしたのだ！

君主獨裁はそれでもまだ守備隊と鞭とを發明した、がショボ〳〵眼の小人達は新しい何物をも、自分の何物をも考へ出すことが出來なかつた。

餘りにも不意にあけられた玉座を占めるや否や、彼等は古びて蟲に喰はれた帝笏をもひつ掴んだ。

坐りぬかれた場所に坐つて、彼等は長い間用ゐ古された方策をも採用した。

即ち第一番に、凡ゆる專制的な權力の永遠の誓を果たした。

『分てよそして治めよ！』

そのために早速永久に和睦することの無い階級爭鬪を宣言したのである。

がそれから、舊帝政時代の武器庫を漁つて、舊い善良な君主獨裁の今に殘つてゐた武器を曳摺り出した。

『反逆を、猶太人を、憲兵を、守備隊を、沒收を、煽動を。』

唯だそれ等を流行の色に塗りかへた丈けで。

反逆の代りに、反革命を。

猶太人の代りに——有產階級。

憲兵の代りに——赤衞軍。

守備隊の代りに——祕密探偵。

沒收の代りに——軍法會議。

煽動の代りに——革命民主黨の武裝せる示威運動。

が本質に於てはすべては昔のまゝであつた。

依然として凡ての異つた思想を持つてゐる人々が反革命の反逆的集團をなしてゐる。

依然として新聞紙は有害な思想のために發行を禁止される。

同樣に喚き、瘤を拵へ、釘の代りに銃劍を頭蓋骨に突き通す。

同樣に住民の一部を他の一部に唆けてゐる。

同樣に無責任と無秩序とが暴威をふるつてゐる。

同樣に國民の意志を虐げてゐる。

同樣に露西亞を亡ぼしてゐる。

すべては昔の通りである。そして完全に有名な、

『かうであつた。かうであるだらう！』

が證明されたかのやうである。

ショボ〳〵眼の小人達は祖國を、皇帝の政府がそれを賣つたその同じ敵に賣り渡した。

唯だ君主獨裁は竊に、軍隊の武裝を解除しながら、それをやつた、がショボ〳〵眼の小人達は

大つぴらに、まるつきり軍隊を潰して終ひながら、それをやつてゐるのである。

唯だ君主獨裁は露西亞を亡ぼすために三年を費した、そしてそれでも尙ほさうすることが出來なかつた。

がショボ〳〵眼の小人達は僅々七箇月にそれを亡ぼして終つた。

これが、全部の相違である！

生活現象

將來死刑はロシヤに於て永久に廢止せらる。

死刑は永久に廢止せらる。

ケーレンスキイ

内閣會議

一

二度までも嚴にそして永久に廢止され、一般的な呪詛と忘却とに渡された、死刑が、何事も無かつたかのやうに、再び我等の生活に這入つて來た、そして日常平凡な現象となつた。

いや、ストルイピンの戰時裁判時代に憂鬱と嫌惡をもつて自分の有名な『生活現象』なる著書を書いたコロレンコは、正しくなかつた。

いや、矢張り、あの時代には死刑は生活現象でなかつた。

どれほどの犧牲がストルイピンの首斬人の手によつて亡びたとしても、如何に容易く當時死刑の宣告がなされたとしても、如何に愚劣な喜劇で當時の裁判があつたとしても、併し當時にあつて死刑は、矢張り、恐怖すべき、生活破壞の、憎惡と反抗とを惹き起す現象であつた。

どんなに素晴しい厚かましさをもつてストルイピンが國家的必要に就いて、又『斯くあるべき、斯くあるであらう』に就いて語つたとしても、併しストルイピンの首斬人は、矢張り、刑の執行を人目を避けて、夜の引明け際に、裏庭でやつたのだ、醜惡なそして恐ろしい仕事をやつてゐるのだといふことを自覺しながら。

いや、眞に生活現象と死刑がなつたのは唯だ我等の時代に於てのみである！

今日初めてそれは一切の特殊なそして嚴肅な形式を失ひ、ネメヂダの芝居がかりの假面をかなぐり棄てゝ、街をさ迷ふ魔性の女のやうに、平凡な、汚らしい、在りふれたものとなつたのである。

教會の鐘の響のやうに、電車のベルの音のやうに、自働車の警笛のやうに、死刑執行官達の銃聲は、殆ど注意を向けさせることなく、絶え間のない巷の騷々しさのなかに消えて行きつゝある。

私はストルイピン時代に、峻嚴を極めたその檢閲に拘らず、すべての新聞紙が一番目につく場所に死刑の宣告に就いての、又別に、刑の執行に就いての、電報を載せてゐたことを憶えてゐる。

今は私達は銃殺を最後の頁にゴシツク六號で印刷された雜報欄から知るのである。

處劃をするために、ストルイピンには、兎に角、裁判所の喜劇と、裁判官と、檢事と、辯護士と、首斬人と、法律の條文と、判決文の作成と、裁可と、尙ほその他の裝飾が必要であつた。

今は裁判官も、辯護士も、檢事も、法律も、判決も無い……。會々武裝をした人間の一團があれば、それが裁判官であり、死刑執行官であり、法律であり、宣告である！

ストルイピン時代には刑の執行は多くの奔走と金とを値した、逮捕し、裁判と刑の執行まで監禁し、絞首臺を作り、首斬人を見付けることが必要であつた……。

今は——第一に出會つた街、一齊射撃、と最う全く『正しき裁判』なのである！

だが、首斬人は？

以前にはそれは獸であり、穢多であり、特殊の存在であつた、仕事はさせてゐたが、併し恐怖と嫌惡とをもつてそれを見てゐた。

今はそれは自分の顏を假面の下に隱さないで、白晝すべてのものゝ眼の前で殺して、そしてその後で仲よく煙草を吸ひお茶を飲みに連立つて行く普通の人間、恐らくは善良なる役人でさへもある。

ストルイピン時代には處刑されたものゝ姓名は一般に公告された、がその身體は秘そかに地に渡された……殺害者達は犯罪の跡を覆ふべく急いだ！

今は……彼等の姓名を、主よ、なんぢは知る、そして屍は街々にどこか倉庫の裏か、コミツサリアート達の庭の上に轉がつてゐる。

かうして國民は慣れつこになつて終つた、子供達は死刑ごつこをやつて遊んでゐる！

さうだ、初めて我等の時代に、二度までも嚴に忘却に渡された死刑が、擬ひ無しの生活現象となつたのだ。

二

最近ペトログラードで七人の大學生が銃殺された。

『生活現象』になければならない裁判官も、死刑執行官も、この時も亦無かつた。

誰も銃殺の命令を與へなかつた、死刑執行官も見付からなかつた。

死刑執行官だけで無く、死體すらも全部は見付からなかつた、七人を射殺した、が收容された死體は六つで、その上一つはまだヒク〳〵生きてゐた。

公報はかう傳へてゐる。

『處刑された者共の死體收容の際、その一つは未だ生きてゐた、他のもう一人は正氣で病院にやつて來た、自分の姓名を名乘つた、併し間もなく又人事不省に陷つて、そして數分後死んだ』

凡てこれは、言ふまでもなく、恐ろしいことであり、厭はしいことである、けれども若しそれが生活現象であるといふことなら、然らば官憲にせよ、死刑執行官にせよ、社會にせよ、知人朋友達にせよ、凡て周圍のもの達の態度が如何に想像も及ばないほど簡單明瞭であるかを見るがいい……。

官憲は處刑の命令を與へなかつたことを、死刑執行官達の人物も殺害の事情も全く知つてゐないことを斷言してゐる。

だがそれにも拘らず、官憲は實にその『處刑された者達』に就いて語つてゐる！

誰かゞ數名の人間を捕へて、裏庭に引張つて行つて、そして何故かどういふ譯か解らないけれ

ども殺して終つた、そして殺した者をも、殺されたものをも、事件の內容をも知らない官憲が、矢張り、平氣で、その場合に實は『處刑』が、即ち最も嚴肅なる國家の正しい裁判のアクトが行はれたといふことを是認してゐる！

これはかう聞える、近頃は、毎日誰かゞ處刑される、だから、屹度、彼等も處刑されたに相違ない！

現象が生活の肉のなかに又血のなかに這入り切つてゐる時、さういふ時にのみ斯くの如き純機械的な事實の認識が可能である。

死刑執行官達も同じやうに信じられないほど簡單に浴衣がけですら自分の仕事に對してゐた、引張つて行つてそして擊ち殺した、がそれから死體をそこへおつ放り出したまゝ、處刑された者達の死を確めることもしないで、處刑された者達の一人が處刑後にどこにも知れず立去つてさへ終つたほどいゝ加減に射殺して置いて、去つたのである。

唯だ良心に責められない爲めに殺害者達はコミッサリアートへ電話をかけただけであつた、死體を片付けてくれ、矢鱈に轉がつてゐぬように！

これが死刑であらうか？　これは何でもない、小さな、死ぬほど嫌になつた毎日の勤めである、そしてそれだけだ。

併しながら官憲こ死刑執行官の他に、まだ社會がある。それが如何にこの恐ろしい出來事に對したか？

かうである、

或る報道によると、大學生達は現存の權力に反抗した爲めに捕へられて、そして銃殺されてゐる、他の報道によるこ――偶然に友達が集つて酒飲んでゐた時に襲はれた……。

どちらが本當か――解らない、けれどもそこには社會的良心にこつて如何に大きな相違があるか。

どんな死刑も恐ろしいことは同じであるにしても、併し一つは――反逆者達の處刑であり、他は――何も罪を犯さなかつた人々の處刑ではないか。

反逆者達は前もつて彼等が何物に向つて進みつゝあるかを知つてゐる。彼等の魂は既に運命的な決論の可能を豫想してゐる。彼等は一種の感激に捉へられてゐて、それが彼等に勇敢にそして

靜に死を迎へる力を與へてゐる。彼等は何の爲めに死ぬるかを知つてゐる！

だが、罪無きものゝ刑戮、それは何こ名付けようもない恐怖である。

如何なる人間の言葉が、何故に彼が殺されるかを知らない人間、自分の無罪を信じ、唯だ懸けられた嫌疑のために彼は死刑に處せられてゐるのであり、而も同時に彼の言葉に耳を傾けない傾けることを欲しないところから、辯解することの無駄であることを目前見てゐる人間の死の前の苦惱を言ひ現はし得るか！……

人間的苦惱の深淵を最も深く見極めたこころから、一人の罪無き者を罰するよりも、十人の罪有る者を放つに若かずこ言はれてあるのも偶然でない！

それも『罰する』のである、が此處では――殺すのだ！

それで、どう？社會はこの人の銃殺された者達についてこの謎の恐ろしさに突き刺されたか？

諸君は最近に罪無くして死刑に處せられた者達の古い經過を、次から次へと事件が起つて來て、その爲めに社會的良心が、死刑に處せられた者の身體がもう疾うに墓の中で腐つて終つた時分になつてすらも落着くここの出來なかつた、幾年かに亘つた事件の經過を憶えてゐるか？

現代の社會は最早かく迄に反應し得る狀態にない。それは勿論、動搖させられた、だが死刑の事實そのものによつて動搖させられてゐるのであつて、何人を死刑に處したか、何のために——そんなことは誰をも興がらせなかつた。

かうした態度で實は日常の生活現象に對してゐる、或はそれはそれ自身非常に悲しいことであるかも知れぬ、けれどもその原因に至つては最早何人のところにもそれを探求すべき精力も興味も無いのである。

それは矢張り何と言つても恐ろしいことだ、けれどももつと恐ろしいのは、比較にならないほど恐ろしいのは、處刑された者達のうちの二人の父親の手紙である。

私はこの不幸な父親が悲しみに打ちのめされてゐ、彼は決して失はれた息子達を忘れないであらうし、彼の悲哀には限りが無いであらうことを信じる。

ところが彼は叙事詩風に穩に息子達の死を物語つて、そしてかう自分の手紙を結んでゐる、

『これは特に腹立たしくもあり、痛ましくもあります。』……

何故に『特に腹立たしいか』といふ原因は上に述べた……。

さながら殺された息子達の父親にとつては特別な又特別ならぬ腹立たしさの原因があり得るかのやうである。

これこそは——最後の恐ろしさである。死刑が生活の中に斯くの如き日常生活の習慣性にまで這入り込んでゐるのである、そしてその結果は父親達の心の裡にさへも最早自分の息子達の死刑の事實そのものに對する反抗が無く、唯だあるのはこの死刑の途方もなく特別の無意味さに對する反抗のみである！

どう仕樣もない、皆な慣れて終つたのだ……生活現象だ！

三

恐らく、私自身も最早慣れつこになつて終つてゐて、若し公報に傳へられてゐる刑戮の或る一つの事實が私を驚かさなかつたならば、この銃殺に筆をとめることをしなかつたかも知れぬ。

『處刑された者達の死體收容の際、その一つは未だ生きてゐた、他のもう一人は正氣で病院にやつて來た、自分の姓名を名乘つた、併し間もなく又人事不省に陷つて、そして數分後に死んだ』

この數分間に私の注意は集注された。

私は全くこの不幸な青年を知らない、彼の性格も、彼の生活も、彼の政治的經歷も知らない、けれども私は痛いほど知りたい、何を彼はこの死後の意識の『數分間』に考へ且つ感じたか？

確かに死後のである、何故ならこの數分間彼は最早生きた人間ではなかつたから。

死の一切の恐怖を彼は既に、捕へられて、どつかの倉庫に連れて行かれ、他のもの達と一緒に壁の方へ突き飛ばされ、そして幾度かの一齊射撃によつて犬の如くに撃たれた時に經驗して終つたのだ。

死刑囚は最後の瞬間まで助かる望みを棄てないでゐるといふことである。

赦免に、突發事件に、最後に奇蹟に希望を懸けてゐる。

これは必ずしも確かではない。

私は死刑囚の經驗する感情は、希望ではないと思ふ。

死が明かであり避け難い時に、何に希望を懸けるか？

それは希望ではない、今、直ぐに、彼がそれ等の人達に對して如何なる惡をもしなかつたとこ

ろのその人達が彼を、熱烈に生きることを欲し、死ぬることが恐ろしく、堪らなく恐ろしいところの生きた人間を捉へてそして殺さうとしてゐることを信じようとすることは人間にとつて不可能である。

戰爭でなく、喧嘩でなく、憤怒に驅られてゞなく、が何の蟠りもなく冷靜に、まるで自分の仕事でもするやうに、彼の恐怖や、彼の絶望や、彼の死の前の苦惱に少しの注意も向けること無しに、殺すのである。

無論、首斬人達の見地からすれば、この人間は一般の幸福にとつて有害であり絶滅に値する、けれどもその人間自身が、彼こそ、彼こそは絶滅に値すると信じ得ないでゐるのではないか？

これと人間意識は永遠に調和し得ない、從つて死刑に宣告されたものは、如何に勇敢に彼が刑場に這入つて來ようとも、矢張り常に既に狂氣の境にあるのである。

が夫故にこの哀れな『そんな筈はない』が、既に銃があげられて、そして恐ろしい命令の言葉が空中に鳴り響くその瞬間にさへも彼を見棄てないのである。

恐らく、この青年の場合もさうであつたらう。恐らく、彼は一齊射撃の音を聞く暇さへなかつ

たであらう、痛みを理解し、彼は最早立つてゐるのでなくして、かじかんだ指で地面をひつ掻きながら凍つた雪の上に横はつてゐるのだといふことを理解する暇さへ無かつたであらう。

けれども確かに一瞬間、彼の腦裏を突然恐ろしい思想が、最後の避け難い意識が掠めて過ぎた、恐らくは一瞬間の百分の一だけでもあつたかも知れないが、

『さうだ、これが死だ！』

そして彼は死んだ。

生命が實際に彼の肉體を離れたからでは無く、生命の環が閉ぢられ、そして既に人間の經驗し得る一切を彼が經驗した故に、死んだ。

肉體的には彼はまだ生きてゐた、そして彼を抱きあげて、自働車に載せ、刑場から運び出した時、彼はボカリと眼を開けさへした。

だが、それはもう死人の眼であつた。

彼はもう一度光を見、雪を見、空を見、家々を見、人々を見た、生きた言葉を聞き、人間の言葉を理解した。

併し彼とこれ等の人々、家々、光と空との間には、最早すこしの關係も無かつた。

尙ほ一種の奇蹟によつて彼の肉體のなかに燃え上がつたその最後の生命の閃きが、すうつとそこへ、內部の方へ、射貫かれた內臟と碎けた骨とをずた〳〵に引千切つた名狀することの出來ない、何物にも比較することの出來ない苦痛の方へ去つた。

さながら恐ろしい遠方から彼は人間の聲を聞いたやうであり、それが解つたやうでさへもあり、應へさへもしたやうであつた、併し恐らくそれを意識しなかつたであらう。

生命の感情も、死の恐怖も、あの白い空や、何故かまだ彼に對して何かをやつてゐる人々に對する興味ももう無かつた。

何となれば彼は既にずつと前に、その一瞬間の百分の一に、遂々、在り得ないこと、考へられないことが行はれ終つたといふこと、彼は殺されつゝある、殺されたといふことを理解した時に死んで終つたのだから……。

で若しそれがさうであるならば、それはよろしい、何故なら人間の死は餘りにも恐ろしく、神自分さへ、その一切のきびしさに拘らず、二つの死を人間に與へなかつたくらゐだから。

四

だが、若しさうでないとしたら、若しその數分間に再び意識が死人に甦つたとしたら、若しこの數分間に彼の、既に終りを告げた全生涯が彼の眼の前を通り過ぎたとしたら、若し彼が意識して武裝せる周圍の人間の眼を覗き込んだとしたら、さうしたらどんな限りない絶望が、どんな憎しみが、どんな惡意が彼の心を刺し通したであらう！

多分、それは世間によくある大學生の一人であつたであらう、學校時代から、國民への奉仕に一生を献げて、この偉大なる國民を信じ、感激に充ちて、敬虔に、歡びをもつて『勞働者』なる言葉を、一度ならず、同じやうに血の氣の多い青年達の間にあつて繰返したところの、國民的桎梏が落ちて、革命が成就し、『祖國の上に華やかな自由の、遂に、美はしい夜明けが開けるであらう』その幸福な時代についての空想の中を飛び廻つて一と晩中寢なかつたところの大學生であつたであらう！

恐らくは、自分の若い生涯の幾年かを彼は監獄の監房のなかで潰したであらう、そしてそこで、

四つの壁に閉ぢ込められて、唯だ灰色の空の一片と不潔な汚物桶とを見詰めながら、而も一時も自分の國民とそれの幸福のために自分を犧牲にすることの必要を信ずる心を失はなかつたのであらう。

自由、博愛、平等は彼の前に輝いてゐた！

そして今や、革命の嵐が吹き荒んだ、多くのものが彼の心の中で顫りいびつになつた、けれども國民に對する愛は彼を見棄てなかつた、自分の運命的な宣言書を起草してゐたその瞬間にも、彼は矢張り人々に奉仕してゐることを信じてゐた。

而もこれ等の人々自身が、彼を捉へて、汚い倉庫へ引張つて行き、生垣のところに立たして、そして殺して終つたのである。

何の故に？　信仰の故にか、愛の故にか、犧牲の消えざる火の故にか？

そして今、この死後の意識の數分間に、彼は突然、彼の全生涯が誤りであつたことを、彼の希望のすべてが滑稽な子供らしい感傷主義に過ぎなかつたことを理解した。

革命は自由の宮殿への壯嚴な行進で無く、激しい獸的な爭鬪であり、人々は殘酷で、獸で、反

逆者であり、彼等の間には同胞愛の感情が無く、惡意と憎しみと復讐こがあるのみであることを理解した。

さうだ、恐ろしい審判の日に、苟もさうした審判があるこするならば、一人の人間の生涯中のこれ等の數分間は人類文化の幾世紀こ、凡ゆる宗教こ、藝術こ、思想と、黄金時代こ未來の人類の同胞愛についての一切の空想とが載せられるべき秤の皿をひつくり返すであらう。

何故なら、すべて此等のものが、若しその爲めに一人の人間の生涯中のこの數分間を必要とするなら、何の役に立つか？

五

が私達は數分では無くして、數日、數年を經驗しつゝある、蓋し現時ロシヤの地の幾十萬の人間が經驗しつゝあるすべての苦惱、絶望、憎惡、悲哀を一つにする時は、疑ひもなくそこに永遠を創り得るであらうからである。

何故なら各々の死の前の惱みが無限だから。

私達の聽覺なり視覺なりが非常に制限されてゐるここ、それは唯だ私達の幸福に過ぎぬではないか。

若し不意に一度に、今日の自由の名に於て苦しめられ殺されてゐる凡ての人々の心に起こるものを悉く見且つ聞くここが出來たとしたら、人類は迚も堪らなくなつて、氣が狂つて終ふであらう。

ドン地方から遁れて來た人が、或る停車場で海兵達が一人の肥つた老年の聯隊長を捉へた話を私にして聞かせた。

身體檢査の際、士官の肩章が長靴の中から發見された、海兵達はその肩章を彼の咽喉に銃劍で突き刺した。手足を縛つて、生垣のところに立てかけて、倒れないやうに杙で支へをして、そしてその地方の住民達に彼の側へ近付くここさへも禁じた後に、去つた。

そして聯隊長は長いここ息を喘ぎながら、全身を震はしながら、ビク〳〵こ痙攣しながら、立つてゐた。それから死んだ、そして固くなつた、青く紫がかつて、恐ろしい形相をして、兩眼をむき出し、鼻こ耳から血を流して凍え死んだ。

恐らく、これも數分間續きはしなかつたか？

が何處か大きな村では兵士達が或る一人の靴屋を死刑に處した。處刑は『特に選ばれた僚友の助力を得て』行はなければならなかつた。廣場の眞ん中に二つ腰掛が据えられた、その一つに宣告を手にした一人の兵士が立ち上がり、他の一つには既に胸をはだけられた靴屋が坐らされた。それから『選ばれた僚友』がサーベルを引き拔いて、靜々と十回ばかり靴屋のそばを行つたり來たりした、斬け寄よつてそして擲つた、靴屋は倒れた、兵士はサーベルを靴屋の脊中に突き刺した、靴屋はブル〳〵と震えて仰向けになつた、と兵士が頭、顏を打つて、遂々、打ち殺して終つた。

『處刑は數分間續いた、』そしてその場に居合せた靴屋の女房は狂氣になつた。

が他の村では百姓達が幾人かの若者に、彼等が怪しからんことには窓ガラスへ石を打付けて壞したといふ譯で、死刑を宣告した……床の上に大の字にさして、そして斧でもつて皆な頭を刎ねて終つた……。

これも亦數分間か？……

だが。こんなことを言つて何になるか？　すべての新聞がこれ等の獸的行爲で充されてゐる、

ロシヤ中到る所で刑戮し殺害してゐる！……直きにこの恐ろしい『數分間』を知らないやうな所が一つも無くなるであらう。

若し想像にして及ぶならば、（だが人間の想像には及ばないのだ）、即ちこれ等すべての恐怖、すべての惱み、すべての死を豫想し豫感し得たとしたら、その瞬間に私達のうち誰が人間たることを止めて、獸に變らないであらう、黃金時代をも、社會主義の王國をも、慈愛平等をも、それによつて人類が幾世紀となく生きて來たところのそれ等すべての美しき言葉をも斷念しないであらう。

六

思ふにすべて此等の思想と言葉とは美しいであらう。恐らく、すべてこれはよりよき未來への最も短距離であるかも知れぬ……。恐らく今日の指導者達は——眞に國民の指導者であるだらう……。復讐が露西亞的になつてゐるのは唯だ國民と革命との敵のところだけであるかも知れぬ。

恐らくさうであるだらう。

併しながら果して銃殺された大學生は、生垣のところで息を喘いでゐた聯隊長は、その女房が狂氣になつた靴屋は、既に革命の名に於て持ち來らされた彼等すべての不幸なる犠牲者達は、私達のために自分の苦しみを許し、彼等の惱みが或る未來の種屬の幸福のために必要なのだといふ思想を受け容れるであらうか？

果して、その名に於てすべてこれが行はれてゐる國民の代表者達は、肩章を聯隊長の咽喉に突き刺した海兵は、大學生を銃殺した赤衛兵は、靜々と靴屋の周圍を歩き廻つた『僚友』は、果して彼等は永遠に人間たることを止めなかつたか？

が斯くの如きは幾百萬である、その上彼等には子供がある……。

斯くて何人も、人類の名に於て、長い、長い年月に、數十代に亘つて人間の有する最も貴重なるもの——人間の靈魂を殺しつゝあるのを見ないのである！

指導者達……。私は近頃の支配者達を知らない。彼等の名前は解つてゐる、けれども私は彼等の顔を見たことが無い。

斯くも恐れ氣なく穢れと血とすべてこの民衆の比較を絶した暴狀を身に引受けつゝある人々、

彼等は何者であるか？

彼等には親友があるか、肉身の兄弟があるか、子供があるか？ 果して彼等は安らかに睡り、自分の妻を愛し、子供達を可愛がり、親友達と談話を交へてゐるか？

とは言へ、私は思ひ違ひをしてゐた、二人私は知つてゐる。

その一人と私は嘗て事務的な、同時に又親しい關係にあつた。

彼の書齋にはピヤノがあつて、私はよく彼の演奏を聞きながら、夜を送つたものであつた。彼は藝術的に、異常な力と深みとを持つて彈奏した。生活は彼を政治と黨派的小冊子の發行に從事すべく餘儀なくした、だが精神に於てはそれは、何よりも先づ、技藝家であり、音樂家であり、藝術家であつた。

もう一人は文藝批評家で、或る雜誌に私と一緒に働いてゐた。それは『ヨーロッパ人』であり、『巴里人』でさへもあつた、いつも洒落た風采をして、きちんとして、芝居好きでそして耽美派であつた。

これ等の二人を私は知つてゐる。

恐らく、私は最早彼等に會ふことが無いであらう、恐らく、私は家宅捜索や逮捕狀に書かれた彼等の署名にだけ會ふであらう、だが私は非常に彼等に會ひたく思ふ。

矢張り同じやうに感激して私の舊友はピヤノを彈いてゐるか、同じやうに私の批評家は上品であるか？

當に在り得ることである！

けれどもその場合私は、彼等が盲目になり、聾になつて、周圍の何物をも見ず、何事をも理解してゐないのだと考へなければならぬ。

さうでなければ彼等は當然自分達の命令書と思想とを棄てゝ、斷付け、助け、獸のやうになつた處刑者達の手に縋り付き、叫び、祈るべき筈であつた、血は充分だ、憎しみと恐れはもう充分だ！

とは言ふものゝ、如何に不思議な形をとつて人間の心の中に熱烈な人類愛と人間に對する野獸のやうな冷酷とが、同胞愛についての明るい空想と暴行とが、高い文化主義と掠奪、殺人、汚辱、流血とが一つになつてゐるかは、誰にだつて解らないのだ。

餘りに、餘りに人間は廣い。

七

平和條約が結ばれても結ばれなくても、兎に角ロシヤは、國家として又國民として苦しむであらう、社會主義的組織が確立しても猛烈な反動が來ても、私達には唯だ一つだけが必要である、即ち再び人間になることである。

我等が社會革命黨であり、過激派であり、立憲民主黨であり、革命黨であり、保守黨であることを忘れて、何よりも先づ我等が——人間であることを思ひ出すことである。

私達の各々が心を有つてゐる限り、必ずや暴行が厭はしくあり、血と涙とが嫌である筈である。

私達の各々の前にも亦同樣に、一切の誤謬、一切の不義、私達が自分の短い、死に渡された一生を害つた一切の迷妄の意識が電光の如くに私達を照らす斷末間の『數分間』があるではないか。

それは私達自身ではないか、露國民自身が言つてゐるのではないか、悲しいそしてやさしい素直さをもつて、憐みと許しとを願ひながら、

『みんな死ぬのだ！』

諸君、偉大なる國民の運命を指導する使命を自認しつゝある指導者達よ、諸君は道德的墮落の如何なる深淵に私達のすべてを導きつゝあるかを見ないのであるか？

諸君は自分の美しい理想が、それを蒙昧な意地惡い人間の群がその中に打ち込だ穢れと血との假面の下にあることを知らないのであるか？

諸君は『すべての土地を勞働階級の手に、』この土地を一アルシンの深さにまで血で浸して置いて、引渡すことが不可能であることを理解しないのであるか？

『幾百萬の人間の惱みをとゞめる』名に於てゞ無くして、何の名に於て、諸君はこの三度呪はれたる戰爭に反對したのであるか？

斯くて諸君は暴行をもつては暴行を亡ぼし得ないことを、血をもつては血を洗ひ得ないことを、鐵をもつては魂の中に愛と同胞愛とを吹き込み得ないことを、が唯だ永遠に人間の間に同胞結合の可能についての思想そのものを否定し去る恐ろしい憎惡と、恐ろしい復讐とを發き立てるに過ぎないことを知らないのであるか。

とは言へ、荒野に叫ぶ人の聲は何を表さなければならないか！

民主化か冒瀆か

畫家・野蕃人がまだるい筆で
天才の繪を塗り潰して
そして自分の無茶苦茶な繪を
その上に無意味に塗りたくつてゐる

一

現代の無意味な多くの合言葉のうちで藝術の民主化こそは——最も無意味である。

何故なら多くの合言葉が無意味であるのは、それは只だそれらの合言葉が現瞬の現實の條件に於ては實現し得ないからだけである、然るに『藝術の民主化』に至つては只もう本質的に無意味である。

藝術と民主化とは、それは互に相容れぬ二つの理解である。

藝術は本來貴族的である。

それがその具現のために特殊の精神的の構造、特に自然から惠まれてゐる人々、精神の眞の貴

族を要求するからだけでは無く、藝術の觀賞、その理解のためにも同樣に一種の才能——美しきものに對する特別の敏感を必要とするからである。

無論、自然は才能の種子を出たとき勝負で撒散らす、眼を瞑つて屢々種子が生長し得ずに亡んで終ふやうな土壤にも投げながら。トルストイが伯爵であつても、カリツオフが町人であつても、シャリヤアピンが百姓であつても——自然にとつてはおなじことである。

才能は純然たる偶然であり、自然の秘密である、從つてから言はれてゐるのも偶然ではないのだ、神の惠によりて藝術家たり！

運命の指が或る頭に觸れると、さうすると、新しい偉大なる藝術家がこの世に出現するのである。

その時彼自身驚いてから訊ねるであらう、

——何處からこれは私に？

才能の發達のためには、無論、順調なる外的條件が必要である、けれどもその發芽のためには、幸福以外、何物も必要でない。

この意味に於ては藝術は民主的どころではない、がこゝから例の『民主化』までは——巨大なる分量の距離がある。

二

こは言へ、何を、いつたいこれらの言葉は意味してゐるのであるか。

藝術の民主化こは？

彼等は非常に流行つてゐる、集會に於ても會合に於ても嵐のやうな喝采を博してゐる、だが辯士自身も喝采しつゝある聽衆も全く彼等を理解してゐないか、さうでなければ少しも喝采に値しない內容を彼等に附與してゐるかどちらかであるやうに見える。

我等の時代に於て『民主々義』はその前に凡てのものが反革命でなければ時代後れの譏りの恐怖のもこに俯伏してゐるこころの最も偉大なる、最も灼かなる偶像である。

夫故に『民主化』と云ふ言葉を發するだけで充分である、聽衆が直ちに尊敬と歡喜とをもつて充ち溢らされるためには。

チエーホフに、彼の『退屈な話』のなかに、こんなシーンがある。

二人の大學生が劇場に坐つてゐる。その一人は靴屋のやうに醉拂つて、居睡つて、舟を漕いでゐる、そして舞臺の上で起つてゐるここはまるでちつこも解らない。が、或る俳優が聲を張り上げるや否や、醉拂ひはぶる〳〵こ胴震ひをして、自分の友達の脇をちよつとつ突いて、そして訊ねるのである、

——彼奴は何を言つに言るのだね？……高尙かい？

——高尙だ——と友達が應へる。

——あ、高尙だ！……ブラーウオー！ ビース！……——こ拂醉ひが絶叫する。

今や我等のこころにあつても、丁度その通りである。

我等は皆な革命的な概念に醉拂つてゐる、我等は皆な疾くの昔に周圍に起つてゐることを考へる能力を失つてしまつたのだ、が『民主々義』なる言葉は依然こして我等の心を支配してゐる。

然らば唯だ何人かゞ感激をもつて聲を高めるだけで充分である、我等はびくりこ震えて、そして訊ねるであらう、

——彼奴は何を言つてゐるのだね？　民主的かい？

——民主的だ。

——あゝ、民主的だ！……ブラーオ！　ビース！……

所で、藝術そのものまでの民主化よりより民主的な何物も存しない故に、凡てこれは——空語に過ぎない、この場合喜ふべき何物も絶對に存しないこと云ふことが誰の頭にも思ひ浮ばないのである。

三

問題は魔術的な『民主化』と云ふ言葉が文字通りにロシヤ語に飜譯されてをらず、可成り擴大された意味を有つてゐると云ふことにある。

民主的にすること云ふことは——それは國民的所有となす事、全國民のために達し得べきものとなす事を意味する。

だが、民主的にすること云ふことは、同樣に又國民的需要並に要求に適合させることを意味する。

この言葉の解釋の如何によつて、それが藝術に適用される時、問題も、無意味も、又は冒瀆も起り得るのである。

劇場、博物館及び圖書館の國民的所有を宣言することは出來る、劇場、展覽會及び圖書館への國民の道を開くことは出來る、けれどもこれら總ては、藝術そのものを一般の所有物となし、一般的に達し得べきものとなすことを意味しない。

成る程、國民は書物を讀み、見世物を見、音樂を聽き、繪を見るフィジカルな可能を受くるであらう、が最大多數のものにとつては、藝術は依然としてそれの理解以上に留まるであらう。

この事からは、無論、藝術の寶庫は從前の如くに小數の特權階級の所有に留まらなければならないと云ふことにはならぬ。

否、彼等に對する道は必ずや萬人のために開かれなければならない。

故に若し議論が藝術の一切の作品を國民の所有に移すことに就いてのみ行はれてゐるのであつたら、然らば論議すべき何物も存しないであらう。

その思考力に應じて、それに就いては皇帝の獨裁政治さへも努力してゐたのだ、國立劇場や、

博物館や、公衆圖書館や通俗的な藝術學校を設けながら。

蓋し藝術は最有力なる教育の手段であり、それが國民の最も低きところにまで達せんことは全人類の福祉でもあるからである。

だが、斯くの如き『民主化』に就いてゞはなく、こゝ云ふよりは寧ろ、それに就いてだけでなく、今日ロシヤの運命を左右し得る權力を握つてゐる人々は語つてゐるのではないか。

彼等の改革案の條項中には實に第二の解釋が這入つてゐる、即ち國民の要求並に需要に向つての藝術の適合、それに際して國民とは國民の最下級を意味する。

そしてこれが無意味なのである、そしてこれが冒瀆なのである。

四

既にレフ・トルストイが狂信的な眩惑に於て、最も教養ある人物から單純な田舎の百姓女に至るまで、凡てのものに解る藝術だけが大切であり、美しく且つ必要であることを宣言した。

偉大なる作家の記憶を辱めることを恐れて、私は彼の矛盾した主張をそれが値するところの言

葉をもつては呼ばないであらう。

藝術には學術に於ることと等しく、自分の伊呂波がある、故に、伊呂波を知らずに、言葉こと理解この限られたる智識をもつてしては哲學上の論文を讀み且つ理解 得ないやうに、藝術的發達の一定の道程を經ないでは、藝術の作品も之を觀賞することこと不可能である。

野蕃人のメロディは——二三の軋るやうな小譜である、彼の繪畫は——原始的な描圖である。

彼の思想は——赤裸の表象である、彼の言說は——亂雜なる音である。

可能的に一野蕃人の裡に美しきものゝ最も深き理解こと美に對する精進こが發見され得る、けれども彼の頭腦、彼の眼及び耳は、自己の思想と感情こと表現の完全のために全人類の幾千年の努力によりて獲得されるこころのその複雜な藝術の形式を理解し得べきでない。

無意識的な審美的感情が或る教養ある歐洲人のこころよりも、朦昧な百姓の魂のうちに寧ろはつきりこと生動してゐることがあり得る、併しベトオーベンのソナタはそれにも拘らず彼にこつては音響の不可解なる混沌たるに留まるであらう、ボッチセリの畫は——亂雜なる汚點、ボードレルの詩は——癡の禁厭たるに留まるであらう。

そして無論、おまけを付けて『バールイニャ』を繰返し唱ふ手風琴の方が、クロード・デビュッシイの音樂よりもより多くを彼の心に語るであらう、けれど恐らくはトルストイ自身も、それ故に『バールイニャ』はデビュッシイの音樂よりもより大切であり、より美しく、より必要であるこは眞面目に主張する氣になれぬではあるまいか。

デビュッシイの音樂は天才的な藝術的啓示として殘るであらう、そして百姓は、自分の『バールイニャ』をかゝへて、藝術の憐なる野蕃人として殘るであらう。

そして一人の百姓のみならず、民衆として、人間の衆圏としての凡ゆる國民も亦。

何故なら民衆は常に天才の遙か後ろから歩いて來るからである。

人類の發達に於ける藝術家の使命は美しきものへの到達に於て最先きに歩み自身の後ろに卽いて來させるこに存する。

彼が民衆の水準線上に出てゐること高ければ高いほど、彼が既に事實上一般的の所有こなり、一般的の所有となつたこころのそれらの藝術の形式より前に去るこ遠ければ遠いほど、それだけ藝術家は天才的であり、それだけ有意義である。

天才は自分の時代を百箇年追ひ越すのである。そして十の時代は、それが凡てのものに解り且つ必要となるまで彼の創作を研究するのである。

斯くて何人にも解る藝術が大切でなく、美しくなく、必要でない許りでなく、その反對に——永く小數者にのみ理解さるべきその藝術こそは大切であり必要であり、且つ美しいのである。

こゝで私は一種の但書の必要を感ずる、我が純ロシャ的なる『未來派』が威張らないために、彼等の『藝術』は永久に『不可解』たるに留まるであらう、何故ならそれは餘りにも『解り』過ぎるから……

五

だが若しトルストイを許すべからざる誤謬のために咎めることが出來るこすれば、愚かしさと藝術の問題に對する完全なる無理解こいふここ以外では、藝術は國民に奉仕しなければならぬ、彼の方に面こ向つて進みながら、彼の要求と缺乏こに應へながら、こ云ふ『民主的な』主義を性質づけるここ不可能である。

我等の今日の生活の恐怖は實に衆多の凡庸なる、中位の、歩卒の人々が我等を支配してゐることにある。

我等の國民は決定的な歴史的回轉期に於て、彼自身の水準線よりも高く拔出てゐる如き眞の指導者を薦めなかつた。

これらの人々は社會主義のパンフレットからの初歩の眞理の外には、何も知らないし又理解しないのである、が藝術のためにはさうした救濟的パンフレットが存しない故に、彼等は彼等にとつて未知の問題を、カルタの供給法に藝術を當欲めて、土地改正法律案の助をかりて決解せんと試みてゐるのである。

——一切の藝術を勞働階級に！

天才をして、こ云ふ、その後ろから群集がついて行けないところの自分の高さから降りて來させよ、彼をして新しき探求と新しき道こより斷念せしめよ、未來の彼岸の限りなき地平線に背を向けて、そしてその反對に、百年間彼に後れた民衆に面こ向はしめよ。

が、天才は極めて我儘で自由である故に——藝術を勞働者の支配のもとに置き、そしてソヰエ

ット政府の代表者達をして、如何なる藝術が大切で、必要で、美しいかを決定させるがよい。

而して若し、運命のアイロニーによつて、地方の『ソヴデップ』が實際に靴屋であり菓子屋であるやうなことが起つたならば、その時は有名なる偶話詩。

禍は靴屋が菓子を拵へ始め……を反革命的讒謗、クルイロ－フを——國民の敵と宣言するまでである。

六

最近運命の意志によつて權力の側に立たされたところの、尨大なる雜誌の凡庸なる批評家が光榮ある小劇場の俳優達に向つて、彼等の永い間の困難なる道程は悉く誤りである、そして今後は劇場に於ては國民にこつて必要であり且つ解るところの脚本のみが上場されなければならぬこ宣告した。

そして老いたる大俳優ユージンは闖入者なる改革者への答こして、小劇場は常に國民にこつて必要たるべく努めて來たと云ふここを控え目に語る以外、他の何物をも發見しなかつた。

かう言ふべきであつたのに、

——さう云ふことであつては我等は劇場を去るより他ない、何故なら藝術は美に奉仕する以外、如何なる目的からも自由でなければならないからである……貴下は入場料の値下げに就いて語ることが出來る、我等が市場の廣場で演技するやうに要求することが出來る、併し貴下は、藝術家が藝術ではなく、政治的偶然の要求に奉仕するやうには要求し得ないのだ。藝術にとつては、有産階級の藝術も無産階級の藝術も存在しないし又存在し得ないやうに、有産階級も無産階級も無いのである……藝術は階級爭鬪の埒外にある、そしてそれがこの爭鬪に觸れる程度に於て、それだけ藝術たることを直ちに止めるのである。國民をして在來のそれよりもより美しき新藝術を創造せしめよ、然らば我等も亦舊きものに仕へたると同じく忠實に新しきものに奉仕するであらう……だがそれが存しない時、藝術が民衆の理解の水準線にまで降るべきではなくして、民衆が藝術の理解にまで向上することを努むべきである……我等は我等の兄弟にして藝術的に作家であり、藝術家である人々が創造したところのものを演ずるであらう、彼等の創造に生ける姿を與へながら。彼等のこころに貼け付けて、そして若しも出來るならば、彼等が速かに新しき『無産階

級の藝術』を創造するやうに命令せよ！彼等は貴下にかう答へるであらう、何人が玉座に卽かうとも、皇帝であらうとも又プロレタリアートであらうとも如何なる藝術も『陛下の命令に據つて』は創られない、そして又藝術にとつては我等の社會革命の一切も一つの素材、美の認識の永遠にして不斷の唯一の道の一小驛に過ぎない。革命があるであらう、無政府があるであらう、恐らくは再び獨裁政治があるであらう、そして再び革命があるであらう、が藝術は常に自分の道を歩んでゐるし又歩むであらう。自由なる道を、人間の魂が自由であるやうに。貴下は人々を强制することが出來る、思想家を殺すことが出來る、だが思想を殺すことは出來ぬ、何故なら思想は不死であるから！

七

如何なる外力も藝術をして自分の道を變へさせないのみならず、天才自身も之をなすべく無力である、蓋し藝術家の意志では無くして、自然によつて彼のうちに入れられた創造の無意識の力が創るのだからである。

藝術家は自分の才能の奴隷である。

實際、時流のために若しくは自己の利益のために自分の魂を强制しようとする試みをなす心の弱き者の多くがあるであらう、が美の女神は、決して裏切りを許さないところの戀人である。

彼女は彼女の囚はれた創作から跡方もなく立去ることによつて彼等に復讐するであらう。

無論、美しきダーマに裏切つて、そして『ケレンキーを靴下のなかへ突込む』プロレタリアートのターニカを歌ふことが出來る、けれどもそれは新しき無產階級の藝術の創造では無いであらう、それは只もう藝術ではなくして、韻律を附した囈語に作り上げられた『書抜き第五番』であるであらう。

永遠にして唯一の藝術は、世紀の初めより永遠の全人類的問題に就いて語つて來た——生と死に就いて、愛と憎に就いて、美と醜に就いて、眞理と虛僞に就いて、信仰と懷疑に就いて……。

藝術的作品の『主人公』は侯爵でも革命主義者でも、資本家でも民衆でも、ブルジョアでもプロレタリアートでも、貴族の家でも百姓の小屋でも、主人でも僕でもあることが出來た、けれども彼等すべては永遠の人間的感情と經驗との表白のために單に外的なる覆被たるに過ぎなかつた。

嘗て『キルギス・ガイサツク族の神の如き女王』を歌つた詩人達、今日『ケレンキーを靴下のなかに突込んで、酒屋に坐つてゐるターニカ』を歌つてゐる者達は、ブルジョアの詩人でもプロレタリアートの詩人でも無かつたし又無いであらう。

彼等は單に『宮庭詩人』、『自分の輝かしい主人の精神的の給仕人であつたし又あるであらう、この主人が何で輝いてゐるとしても——王冠であつても又は油染みたシャツボであらうとも。

そして彼等の運命は——主人の怒りを恐れて、彼に與へられた寶物を地中に埋めた奴隷の哀れな運命である。

八

我等が勝利者達の國に於て見且つ聞くところのものは、それは藝術の民主化では無くして、單なる冒瀆である。

人間精神の自由なる發現のうちの最も自由なる——宗教的感情を——ある一定の政治的見解の確立のための武器としようと努めた時代があつた、そして主の宮に於て『最も信頼するに足る、

又最も專制的な我等の皇帝のために』祈らした時代があつた。
教會は政治の指導者となり、そして死せる官廳となつて死んだ。
今やも一つの教會、も一つの宗教を殺さうとかゝつてゐる。
藝術の宮を、美の宗教を。
彼等をも政治的熱情の武器となし、ある一定の政治思想の指導者たらしめんと欲してゐる。
恐らくそれは成功するであらう、恐らく藝術は永い間死ぬであらう……

されど繪具は年と共に
からびたる鱗となつて剝落する、
天才の繪は我等の前に
新しき美しさに輝やく。

贈物によつて、威嚇によつて、又流行によつて、勝利者達は最も劣等なる、最も凡庸なる、最

作者の感想—(終)—

も不完全なる者だけを自分の國に惹きつけるであらう。
眞正の藝術家達は自分の道から離れないであらう、自分の偉大なる先行者達の仕事を續けながら、ブルジョアヂイに就いても民主々義に就いても氣をもむこと無しに、そして若し何時か創造するならば……新藝術ではなくして、藝術の新しき形式を創造するであらう、然らばそれは無產階級の藝術ではなくして、全人類的藝術であるであらう、斯くの如きものでそれはあつたし又斯くの如きもので永久にあるであらう。

大正十三年十一月二十日印刷
大正十三年十一月廿三日發行

（定價一圓五十錢）

編纂者　馬場哲哉

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　水守榮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　人文會
振替東京六九四〇八番

發賣所　東京市牛込區天神町六番地　隨筆社
振替東京六六〇七九
電話牛込三四番

（作者の感想）

印刷者　東京市牛込區山吹町百九十八番地　安藤金重

印刷所　東京市牛込區山吹町百九十八番地　安藤印刷所

子規隨筆集

正岡子規著
島田青峰編

定價一圓五十錢
送料十二錢
四六判上製

新刊

目次

▲小園の記▲戀▲墓▲旅▲病▲『松蘿玉液』から▲『墨汁一滴』から▲『仰臥漫録』から▲俳諧▲歌よみに與ふる書▲故郷▲海城丸船中▲書簡集から▲消息 以上

獨歩隨筆集

國木田獨歩著
國木田虎雄編

定價一圓五十錢
送料十二錢
四六判上製

新刊

目次

▲武藏野▲渚▲死と自覺▲趣味について▲モデル問題▲雜錄▲予が作品と事實▲机は部屋の置物▲奈何にして小說家となりし乎▲死生觀▲雜觀▲欺かざるの記▲書簡▲海軍從軍記▲わが過去▲憐れなる兒▲畫▲鎌倉の裏山 以上

■世界名著叢書■

第一編

ルソオ著 平林初之輔氏譯

民約論

◇近刊

四六判箱入上製
定價二圓
郵送料十五錢

佛蘭西革命は近代文明の源泉である。而して佛蘭西革命の原動力となつた『革命の實典』はジャン・ジャック・ルソオの民約論である。泰西の大家が歴史を通じてその影響の廣汎なることルソオの著書に匹敵するものなしと斷言したのは洵に偶然でない。主權は人民の一般意志の發現であつて何人にも移譲する能はざるものであるといふルソオのかゝげた政治の大原則はたゞにフランスの專制政治をたほしたばかりでなく、今なほ何等かの形に於て世界の民衆運動の羅針盤となつてゐる。明治初年に於ける吾國の自由黨の大運動が民約論の思想に指導されたものであることも周知の事實である。洋の東西をとはず苟も現代政治を理解する爲めには何人も民約論の關門を通る必要がある。譯文の平易、明快は最も誇りとするところ、而も嚴正なる原文直接譯であるはいふ迄もない。

島崎藤村氏著　中村星湖氏編

藤村隨筆集

□四六大判上製
□定價一圓七十錢
□郵送料十二錢

◇新刊◇

本書は明治大正の文豪島崎藤村氏の文集である。章を分つこと五、項目は長短三百に及ぶ。盡く藤村氏が三十年間の苦心になる文章の精粋である。編者中村星湖氏は多年の愛讀者たるをもつて、異常の苦心と努力を惜しまず編纂の業に當られた。以て、如何に本書が近時出版界稀に見る光輝ある著述だといふことが知れよう。編者の序言によれば「年代を追ひ、事件、事情の連絡を顧慮した爲めしぜん一種の『島崎藤村自叙傳』の觀あるは、編者の甚だ愉快とする所である。」と。即ち、本書は原作者の文章の精粋を讀み得ると同時に、原作者その人の全面容に接することが出來るわけである。藤村氏の愛讀者は無論のこと、苟くも、文學を知り、文章を學ばんとするものは是非一本を備ふべき價値あることは、呶々の辯を要する迄もない。本書世に出づるに先だつて、大いに世評を喚起し、教科書に採用せんとする學校なぞも多いといふ風評を聞くに到つたのも當然のことであらう。

527
65

終